

〈書 評〉

貴志幸之佑著『貿易金融・為替の史的展開』

(ミネルヴァ書房, 2004年3月)

川 本 明 人

(受付 2004年10月6日)

I

グローバリゼーションの進展とともに貿易、為替の役割はますます大きくなっている。世界貿易は2003年で年間7兆ドルを超える規模に達し、各国経済の国際的交流と資源の地球的規模での配分に大きな貢献を果たしてきた。また外国為替取引も1日1兆8800億ドル(2004年)という巨大な額に達し、4日間で年間貿易額と並ぶことになる。また、かつて国家主導により展開された貿易金融は、貿易政策の変化と相まって、多様な形態に変化してきている。

このたび上梓された貴志幸之佑著『貿易金融・為替の史的展開』(ミネルヴァ書房, 2004年3月, 332ページ)は、資本主義の発展過程の中で貿易および為替がどのような変化を遂げてきたかを、歴史的事実を現代に投影しながら包括的に描写したきわめて意欲的な作品である。

「はしがき」で著者は本書について、「資本主義の生成・発展の歴史的過程の各段階に応じた貿易政策や為替政策の変転に伴う貿易形態の変化に応じて貿易金融・為替の形態や機能も変容して国民経済に大きな影響を及ぼしている実態を史的考察し、検証を試みよう」と(iページ)したものであるとしている。その際、著者の視点の一つとしてあるのは、外国為替が本来貿易決済機能から始まった取引であるにもかかわらず、実需取引から離れて金融資産と結びついたということであり、その歴史的実例として、

中世における徴利禁止令下に見られた乾燥為替による貸付や、現代におけるスタンドバイ・クレジット、デリバティブ取引等をあげている。もう一つの視点は、貿易政策と為替政策は一体化して国策的観点から遂行されてきたということであり、貿易金融が制度金融となるとともに、官民癒着や独占資本擁護といった構造が築かれてきたということである。

こうした問題意識を持ちながら、単に歴史的事実の描写にとどまることなく、また単に実務的な解説を施すのではなく、つねに著者の問題関心を表に出しながら、野心的、挑戦的な視点を提起しようと心がけている。著者は長年、日本の外国為替専門銀行であった東京銀行に勤務し、ドイツなどでの海外体験も豊富に持つ。そうした現実の貿易・為替・金融への実務的関わりが本書を支えているのはもちろんであるが、加えて当該分野に関する驚異的な研究文献渉猟により、理論的な側面の補強も十分に固めていることが、類書にない本書の特色となっている。

序章に続いて、全体が3部18章から構成されている。第Ⅰ部では貿易金融・為替の原始形態としての冒険貸借を検討しながら、重商主義時代の国際決済機構ないし為替理論が叙述される。第Ⅱ部ではロンドン国際金融市場が確立していくパックス・ブリタニカ時代の貿易金融・為替のメカニズムとして、とくに荷為替信用状制度や当時の貿易慣行が説明される。第Ⅲ部では、パックス・アメリカナ期における貿易金融制度の変遷が、金融国際化、リスク、IT 革命などへの対処もまじえて概観される。

以下、3部構成に従って本書のポイントや特徴となる論点、さらには評者が感じた問題点などを取り上げてみよう。

Ⅱ

まず序章で、著者による「貿易金融」の理解が総括的に示される。著者は貿易金融の解釈として、輸出入に伴う資金融通・信用供与のみならず、「国際貿易の実需取引並びに貿易決済メカニズムに関連して発生する直接的、間接的に関係する資金供給・調達の金融手段、信用・便益供与、リスク回

避手段すべてを含めた信用・保険授受の現象を総称したもの」(1ページ)と解する。そして、「世界政治経済の構造的な変革に応じた貿易金融の形態変化の実態」を「史的考察」していくというのが本書であるとする。見られるように、貿易金融を輸出入に伴う資金融通だけでなく、さまざまな金融手段やリスク回避手段などを含めてきわめて広範に捉えていることが示されており、これが本書の題名の由来となった理由でもあると考えられる。本書の特色はこの序章における叙述に凝縮されていると言っても過言ではない。

さて、第Ⅰ部「貿易金融・為替の原始的形態」では、第1章から第4章までがまとめられている。第1章では、貿易金融の原始的形態が中世の冒險貸借(海上貸付)であることが指摘される。これは航海という危険を代償にした貸付(資本投下)を行って高収益を得ようとするもので、投機性の強いものとされる。第2章では、貿易金融が手形手法により普及してきたことを背景に、国際決済機構の原始的形態が手形決済定期市に求められる。ヴェネチア、シャンパーニュ、リヨンといった都市における商業の発展とともに手形決済をベースとする信用制度も発展し、16世紀にはアントワープが商業・金融の中心地となって、中継貿易港と同時に国際金融・資本市場として発展した。第3章では、貿易金融に大きな役割を果たす多国籍銀行のルーツとして、イタリア商人メディチ家およびドイツ商人フッガー家の企業組織が説明される。第4章では、16世紀から17世紀にかけての初期重商主義時代における為替理論が紹介される。マリーンズやトーマス・マンら各論者がそれぞれの利害関係を持ちながら持論を展開した状況が、歴史的背景をふまえて叙述されている。

以上の第Ⅰ部は、資本主義前史における貿易金融・為替の原始的形態を扱った部分であるが、貿易金融・為替の史的展開の中に現代の事象を投影しようとする意欲的な問題意識に満ちあふれている。たとえば、多国籍銀行の原始的形態として説明されたフッガー家やメディチ家の盛衰をみることで、当時における資本の集中・集積、国際拠点間ネットワークの構築、

政治金融への傾斜などの状況が現代多国籍銀行の姿と重ね合わされる。また、重商主義時代の為替理論の代表であり、外国金融業者の貿易金融・為替支配からの脱却を求めたマリーンズの主張は、為替管理につながっていったことから、アジア通貨危機におけるヘッジファンド批判と為替管理政策をとったマレーシアの対応とだぶらせている。これらはきわめてユニークな観点として本書の特色を象徴するものと言える。

III

第Ⅱ部「ボックス・ブリタニカにおける貿易金融・為替」では、第5章から第9章において資本主義の確立期および独占資本主義段階における貿易金融・為替の歴史が述べられる。まず第5章では、ロンドン国際金融市場の形成に大きな役割を果たした委託販売業者であるファクターによるファクタリングの意義が確認される。ファクターによる委託販売を通して手形振り出しや信用供与が行われたことから、手形割引市場が発展し信用供与の連鎖が形成された。第6章では、ファクターから転じたマーチャント・バンクの活躍と、国際通貨ポンドの確立および国際決済機構ロンドン市場の形成が描かれる。第7章では、信用状の役割が歴史的な発展過程を見据えながら考察される。銀行が債務者に代わって支払確約することで貿易決済の円滑化に供してきた信用状（L／C）は、オリジナルな役割から多面的な機能をもつさまざまな信用形態に転化していることが詳細に述べられている。第8章では、アメリカおよびドイツの独占資本形成期における貿易金融の実態が描写される。さらにボックス・ブリタニカが衰退していく20世紀初頭から、1930年代の貿易縮小と為替管理の時代までの歴史的推移が述べられている。ついで第9章で、1930年代から第2次大戦直後までの各国の為替管理やダンピング、ブロック経済の実態が描かれている。

ボックス・ブリタニカ期は、言うまでもなくロンドン国際金融市場の確立期であり、ポンドを国際通貨とする国際金本位制が成立した時期である。またその衰退期である20世紀前半は、再建金本位制が成立する中で、国際

通貨がポンドからドルへと移行する時期でもあった。金本位制下の貿易決済の仕組みや為替・金融政策については研究蓄積も豊富である。それらをふまえながら、ここでの特色をあげれば次のようになるだろう。

まず、ファクターと呼ばれた委託販売業者の活動に焦点を当てて、彼らがロンドン国際金融市場の形成に大きな役割を担ってきたことを明らかにしたことである。彼らは海外に商業ネットワークを構築し、委託代理販売を遂行しながら、貿易金融・為替に関しても委託人に便益を供与した。そして資本蓄積をしながら、貿易金融および資本取引業を担うマーチャント・バンカーとして地位を確立していくのである。

これと平行して、貿易決済のメカニズムも旧式L／Cから荷為替信用状へ転換していく。すなわち、荷為替信用状制度により手形決済による為替と貿易が一体化し、債務者に代わる第3者が支払い確約をして貿易決済の円滑化を図ることが可能となったが、この意義や歴史的発展過程、現代との対比が詳細に叙述されている点は大きな功績といえる。

それでは、19世紀から20世紀の転換期における貿易金融・為替の状況はどうであっただろうか。著書はこの時期を独占資本主義段階と規定し、資本集中＝巨大化に果たした貿易金融・為替の役割を説いている。ただ、資本輸出を主体とする産業独占体の形成にあって、貿易金融・為替の役割が、パックス・ブリタニカの最盛期ほどはっきりと提示されていない。確かにパックス・ブリタニカは衰退に向かっていったが、国際通貨体制としては、イギリス以外の諸国が続々と金本位制を採用して国際金本位制が形成された時期でもある。さらに第2次大戦後における基軸通貨としてドルがポンドにかわって準備されていく時期でもある。グローバルな体制としてできあがった国際金本位制とその崩壊のなかでの貿易金融・為替の役割がどのようなものであったか、すなわち、第6章で示されたロンドン国際金融市場の確立期以降、どのように変質しながら金融市場、資本市場、手形割引市場などに影響を与えていったかの分析があってもよかったと思われる。

IV

第10章から最終の第18章までは、第Ⅲ部「パックス・アメリカナにおける貿易金融・為替」として、第2次大戦後から現在までのグローバル化、IT化時代における貿易金融・為替の歴史的推移が詳しく述べられる。東西政治体制分断化の求償貿易（第10章）、各国の公的貿易金融制度（第11章）、国際通貨体制の変遷（第12章）、ユーロ市場の発展とプロジェクト・ファイナンスやリース（第13章）、国際取引における保証（第14章）と、それぞれのテーマが包括的に描写されている。さらに第15章からは、1980年代から今日までの金融の大変革による貿易金融・為替の新たな形態が述べられる。セキュリティゼーション（第15章）、金融革新によるリスクとデリバティブ（第16章）、貿易金融のEDI化（第17章）、国際決済システムのRTGS化やネットティング（第18章）の各内容が詳細に述べられている。

ここでの特徴の一つは、東西貿易を前提とした旧ソ連を中心とする社会主義圏の貿易決済システムを明らかにしていることである。戦後のIMF体制は、ホワイト案をベースにするブレトンウッズ協定により枠組みが作られ、アメリカないしドル中心の国際通貨体制ができあがった。戦後の貿易、国際通貨体制の研究はもっぱらIMFおよびGATTを対象にしたものが圧倒的であった。この枠組みに入らない社会主義圏が、振替ルールを基軸としながらコメコン銀行を通じる双務清算方式をとったが、著者はこれをケインズ案の採用であると指摘して、東西貿易における求償貿易金融のメカニズムなどとともにその意義を展開している。社会主義圏としては、さらに香港が返還された中国の「一国二通貨制度」についての分析も加えている。

もう一つの特徴は、第14章で保証の国際化を取り扱っている点である。国際的な保証が本格化したのは1960年代のプラント輸出が始まってからであると著者は説くが、同時に信用供与あるいは契約保証などが貿易の発展とともに制度化されたことを強調する。保証を巡ってはさまざまな用語が

使われ、意味する内容も多様である。これらを丹念に追いながら、保証（L／G）の発展と多国籍企業活動の深化やユーロ市場の増大との関連を指摘している。さらに銀行保証（B L／G）などが金融取引に組み込まれながら、デリバティブなどの巨額の金融投機取引を可能にしているという問題点にも迫っている。保証という、信用取引ないしはリスク取引の核心的部分に焦点を当てて歴史的な整理を施した著者ならではのアプローチが印象的である。

V

各章は、単に実務的解説や歴史的描写にとどまらず、著者の独自の視点から各テーマについて理論的整合性をもとめる姿勢に貫かれている。該博な知識と実務体験に裏付けられた包括的で体系的分析が各章に施されている。理論面、実務面の両者からアプローチする手法をとりながら、貿易金融・為替についての著者独自の鋭い分析力が随所に発揮され、学ぶところが多い。

ところで、本書全体を通して感じたことを率直に言えば、まず論理展開の中で長い文章が時々目につくということである。一つの文の中に切れ目なく多数の論点が示されることがあり、ある意味で本書を読みづらくしている。また、歴史的事実を現代に重ね合わせていくオリジナルな手法が折角とられているにもかかわらず、時には単純な比較や並列に終わっているところがあり、歴史のダイナミズムを感じさせるような迫力を出す工夫が一段とほしいところもある。とは言え、最初に述べた著者の問題意識と歴史認識は、本書から十分に読みとることができる。

以上、本書の特色にふれながら、貢献と思われる点や問題点と感じたところを大まかに述べた。最後に個別の論点として、評者が疑問ないし不足と感じたところをもう少し付け加えておこう。

まず第1に、外国為替取引に関してである。広義の貿易金融と係わらせて広く外国為替を説明する著者の独自の展開方法は、それ自体きわめて興

味深いものがある。他方、著者は、外国為替取引の意義を歴史的に追いながら、現代に近づくほど外国為替は実需要因よりも金融取引関連の要因の方が強くなっていることを指摘している。また、一方で外国為替取引には「ファンダメンタルズが重要」という指摘もしている。ここで言うファンダメンタルズが、一般に言われる経済指標や貿易に裏付けられた国際商品取引などのことを言っているのかどうか、著者が別のところで言う「実需」と同義なのかどうか、どのような観点で「ファンダメンタルズが重要」という規定を行っているのか、その論拠が不明である。投機やデリバティブなどの金融取引要因についても、金融肥大化の結果と係わらせているのみで、貿易やマクロ経済、市場の構造的な分析がより求められるところである。

ちなみに氏は、本書の続編としてまとめられた「外国為替の理論と実務—外国為替の本質についての論争によせて—」（『大阪商業大学論集』第133号、2004年）という論文において、日本の為替本質論争を丹念に追いながら、この論争が外国為替に関する学際的研究について成果を挙げたものの、国民経済的な為替・金融政策論争に踏み込んでいないと批判する。政策と係わらせた議論の必要性は同感であるが、ここでもファンダメンタルズと金融取引という二元的分類以上には展開されておらず、理論面・実務面双方からのより体系的な外国為替論の構築がのぞまれる。

第2に、貿易金融・為替の世界の広がりとリスクの多層的な展開とのつながりについてである。貿易金融を、通常のように決済システムや信用構造のしくみの中で位置づける際にも、リスクについて著者は当然言及している。一方で広い意味での貿易金融・為替において、デリバティブや保証など取引が重層的になるなかで発現する現代的リスクにも、著者は大きな関心を寄せている。そこで、リスクの視点からすると、どのように貿易金融の史的展開をとらえることができるか、これについての一貫した説明が乏しい感がある。著者はこれまでリスクマネジメントについてもさまざまな角度から業績を発表している。したがって、リスクに満ちあふれた現代

の金融・為替の世界に、著者が研究対象とした貿易金融・為替の足跡からどうたどり着くのかという整理があってもよかったと思われる。貿易金融・為替の史的展開は、貿易や資本取引に伴うリスクを意識しながら進んできたはずである。

第3に、現代さらには貿易金融・為替の将来像を見据えた場合、焦点になっている WTO の帰趨や国際金融アーキテクチャーなどの現代的課題への接近が弱い印象を受ける。貿易や決済システムにとって、今日議論されている国際的枠組みはきわめて重要だと思われる。たとえば、第17章、第18章で詳細にふれられる貿易金融・為替の IT 化、さらには RTGS 化や CLS 銀行による決済システムの進化が、国際貿易構造や国際通貨体制の安定性や健全性に寄与すべき道筋については十分に検討されているとは言えない。

以上、いくつかの評者なりの疑問点や感想を述べてきた。いずれもこれらは本書の問題点と言うよりは、むしろ本書の読者が今後考えていかなければならない現代的課題であると言った方がよいかも知れない。本書がそうした議論を深める上で十分有益となりうる地道な研究成果であることを、再度強調しておきたい。